

勝林寺寺報

わたしに見えてる世界

私が生まれて間もないころは石油ランプのころで、大人が毎晩、ランプのホヤ掃除をしていたのを覚えている。間もなく白熱電灯に変わった。小学校の宿題は夜、明るい電灯の光の下でしていた。あの戦争が厳しくなったころ、例の「灯火管制」というものがあつて、わたしの家の川向こうの家がとても明るい緑色の「螢光灯」という明かりを灯した。羨ましく、ねだって私の家にもその「螢光灯」をつけてもらつた。緑のその光が、戦争が終わって新しい時代が来たことを実感させた。

太古、人間が失つてしまつて赤・白・緑の光り、そして今度、ノーベル賞を贈られた3人の先生の粘り強い智慧のご努力のおかげで、「青色」の世界をこの世界に開いて下さった。人間は、このように、その智慧や技術や努力で以て未知の世界に踏み込んで、刻々、世界を広げて行きつある。その反対に、昔、あつた素晴らしいもの「すみません」「ありがとうございました」「おかげさまで」「もつたいない」「絆」などなどを失いつつある。

人類は、いつも「今・自分」の住んでいる時のその世界からしか、ものを見たり聞いたりしていない。「ズイの穴から天井のぞく」のが普通の人間の暮らし方・生き方のようである。「自己本位」「自己中心的」「利己的」、仏教ではこれを「我見」「自我」「我執」とよんで一番警戒し、自我に閉じこもつたこの「闇」「迷妄」の世界をうち破り、とらわ

れのない広い世界を開くこと、それを「解脱」にめざめる「無我」「空」「如」の世界をめざす道が、それが「仏道」であると勵んできた。

最近、わたしはこんなことも教えられた。
人間・わたし、というものに如何に無知であったか。

「私のからだ」。これは「昔から変わらぬわたしの持ち物」「わたし一人の専有物」と。

ところがなんと「わたしのからだ」を構成しているもの頭の髪の毛から足の爪先まで、脳・胃・腸・膀胱など内蔵のすみずみまでの臓器、ふくめてそれを構成しているいわゆる「細胞」は数えて600兆から1000兆という。それが日々更新をくりかえしている。それだけではない。一つ一つの細胞にはそれぞれいきものまた男女の性によって違うが男なら二十四組の遺伝子があり、その遺伝子にもミトコンドリヤなどいろいろの機能を持つた器官がつまつていて、消化機能、生殖機能遺伝機能いろいろ機能分担を担当する器官がここには詰まっているといふ。実ばわたしのわたしの「いのち」は刻々生きていくのでした。わたしのからだもいのちも、実は、生きている。それが真実であったのだと知りました。本当は、私、無知の世界を生きている、といつてもよいかも知れません。

これはほんの一例です。

この無知・無明の者が、無知・無明のわたしの世界を、いわば大手を振つて生きている浅はかさ。仏教ではこれを「無明と渴愛」の生き方だと見ます。なにも見えていないのにこだわつて振る舞う生き方だと歛斥します。そしてこれが人間、苦悩の根元と教えます。

(前住職)

報恩講法要をお勤めします

最大行事

十一月 勝林寺 予定

日時 十一月二十一日(金曜日)
午後 七時三〇分より
御伝説拜読六時三〇分より

お斎は、法要終了次第
お斎は、法要終了次第

一日(土)	高福寺 報恩講
二日(日)	岸下 豊宅 一三回忌
三日(月)	光顕寺 報恩講
七日(金)	正福寺 報恩講
八日(土)	永井 実宅 三回忌
九日(日)	岩上 悟宅 一周忌
一一日(火)	平野さかえ 一周忌
一三日(木)	石坪好延宅 三三回忌
一四日(金)	西方寺 報恩講
一五日(土)	おみがき清掃奉仕
一六日(日)	福成寺 報恩講
一七日(月)	川見祐枝宅 忌明
二二日(金)	水嶋伊佐夫宅 一周忌
二三日(土)	出石組連研(勝林寺)
二四日(月)	正法寺 報恩講
二六日(水)	正法寺 報恩講
二七日(木)	佐田・奥栗尾 報恩講
二八日(金)	口栗尾 報恩講
二九日(土)	生田克己宅 忌明
三十日(日)	西宗寺 報恩講

十一月二十二日(土曜日)
午前 十時より
お斎は、法要終了次第

二日目は、送迎バスを差し向けてます。ぜひ、御誘いあわせの上、お参りください。

準備の都合上、地区代議員さんにお世話になり、出欠の確認をさせていただきます。また、合わせて、お供え(お仏飯一升、料理物、もち米三合)を集めていただきます。ご協力をお願いいたします。(詳細別紙)

勝林寺報恩講



葬儀

十月八日
川原 川見正則様 六五歳

二八日(金) 口栗尾 報恩講
二九日(土) 生田克己宅 忌明
三十日(日) 西宗寺 報恩講

十月二十八日
出合 生田俊雄様 八十九歳

二七日(木) 佐田・奥栗尾 報恩講
二八日(金) 口栗尾 報恩講
二九日(土) 生田克己宅 忌明
三十日(日) 西宗寺 報恩講

(敬称略)

「遇（ぐう）」（あう・もうあう）

漢字の成り立ちを見るのは、おもしろい。この「遇」。作りの「愚」は、この世には、ありえないオバケ。だから、「あうはずのないものと/or/い」。縁。人や出来事との出会いの不思議さに驚き喜んだ親鸞様は、著書の随所にこの文字を使った。

さて、ある渚近くの砂の丘で、たくさんの亀卵からかえると一斉に海に向かつてはい出していった。親亀は、子どもを産むと先に海に泳ぎ出していた。案内するものはない子亀たちは、てんてこ海の沖に向かつて懸命に泳いでいく。その子亀集団の中に、一匹、目の見えない子亀がいた。目の見えない子亀は、はじめはみんなと群れて泳いだが、何日かしたら独りぼっちになってしまった。それでも泳いだ。東の海にいるとき、恐ろしいクジラのおじさんに出逢つて、もうおしまいかと思った。西の海を泳いでいるとき、楽しい小魚の幼稚園の遠足と出会つて、みんなで歌を歌つて遊んだ。南の海では、優しいオットセイのおばさんとしばらく遊んだ。北の海では、タコやイカの兄さん姉さんと踊つた。でも、独りぼっちは心細かった。心細かったが、見えないながら子亀は、泳いで行けば、いつかは大きな木の穴から外へ出られると信じていた。それを信じて、昼も夜も泳ぎに泳いだ。ある日、ゴンと頭を海に浮かぶ木にぶつけた。亀はびっくりしたが、その木の穴に頭をもぐりこませ、やつと外へ這い出した。外は、明るい太陽の光がサンサンと輝いた広い広い春の海だった。どこからかやさしい声が聞こえた。

「よく来たね、待つてたよ。もう大丈夫。」

このお話は、「法華經」の「盲亀浮木のたとえ」。人やものとの出会いの不思議さを教えられます。

お釈迦様の教え

仏教は、インドに生まれたゴータマ・シッタルタというシャカ族の王子が苦行の末悟つた

「法（ダルマ真理）」です。

インドには紀元前三千年頃、銅器をもつた都市文化があり、モヘンジョダロなどいろいろな都市機能を備えた都市国家であつたといわれます。しかし、紀元前十三世紀に突如、アーリアン人によって侵略され、壊滅してしまいます。アーリアン民族は「リーグー・ベダー」などの聖典によるバラモン教をもつた民族で、インダスラモン思想にもとづく強い階級社会を敷きました。バラモン（司祭階級）、クシヤトリア（戦士・王族）、バイシャー（庶民）、スードラ（奴隸・賤民・被差別民）。この制度は、バラモン教社会に厳しくしかれ、二十一世紀の現代にいたるまでも続いています。この差別社会には、業報思想（業は、必ず来世に結果を招く）があります。善因樂果・惡因苦果というものです。

私たちには日々の生活の中で、様々な出来事に出会います。そこで、自らの力ではどうしてみることもできずに、道が閉ざされたような思ひを持つたり、さびしさや孤独を感じたり、焦りを持つてしまふことがあります。そんな時に「大悲無倦常照我」という言葉をふつと思いつき、うつむき続いている自分に、しづかに励ましがなされていることに気づき、もう一度顔をあげ前を向く力が与えられます。（中略）

如來のいのちをこのように確かめるとき、そこから一つの問いが生まれてきます。なぜ、如來は、無倦の大悲をもつて常に衆生を照らしてやまないのか、そこには、いったいどのようなことがあるのか。如來の無倦の大悲を必然させるところには、如來に「背く」「あり得べからざるあり方において在る」私たちの事実があります。私たちが如來によつて「安慰」を与えられることは、何者にもかえがたい喜びではあります。私たちが如來によつて「安慰」を与えられることは、何者にもかえがたい喜びではあります。私が私に、「背く」わが身の事実、「あり得べからざるあり方において在る」われらの事実を、どこに「背く」わが身の事実、「あり得べからざるあり方において在る」われらの事実を、どこまで明らかにしていくところに、「安慰」も確かなこととしていただけがいいこととな

法語カレンダー十一月（HPより一部抜粋）

衆生にかけられに大悲は無邊である

どすん

「楽しかったわー」
「ずっと 笑つとりました」

「なーんにも忘れて、わはは
わはは ゆうとりました」

お参りしてくださいました皆さんが、

帰り際に私たちにかけてくださいました言葉の

数々です。うれしくて、もつたいたなくて、有り難い限りです。これらの言葉で、ふと思いついたことがあります。東日本大震災の後、アスリ

ートが「こんな大変な時に、スポーツなんじ

る姿を見て、被災者の方の力になれたら幸せで

ます。うれしくて、もつたいたなくて、有り

難い限りです。これらの言葉で、ふと思いついたことがあります。東日本大震災の後、アスリ

ートが「こんな大変な時に、スポーツなんじ

る姿を見て、被災者の方の力になれたら幸せで

ます。うれしくて、もつたいたなくて、有り

（前住職）

ります。

（三木彰円 大谷大学准教授）

確かに私にも繋がつて（笑）（文責 坊守）